

京市富士前尋常小学校代用教員、訓導となつた。折りしも大村西崖は東洋美術史研究の後継者を、鈴川信一は美術学校火災で焼失した学籍簿の整理をする手伝いを必要としていたので、両者相談の上、戸部を起用することになり、同六年十二月十七日に彼は東京美術学校雇（美術史研究室助手兼教務掛）に任命された。これより西崖の指導のもとに東洋美術史研究に没頭することになり、同八年九月から東洋彫刻史授業分担を命ぜられ、同年十二月には助教授に昇格、翌九年一月より東京女子高等師範学校講師（日本絵画史）も兼任した。戸部は西崖の大著『密教発達志』の著述を手伝い、また、西崖の推薦により東京帝国大学の高楠順次郎の私的事業である「聖教調査会」に参加して仏教資料蔵庫の調査を行い、美術史料を得て研究を進め、論文を発表し始めた。かくて将来を期待されていた時期に、先輩の平子鐸嶺と同じく、中途にして燃え尽きてしまったのであった。

戸部の死後、友人の建昌大夢、鈴川信一、森田亀之助、田辺孝次らは十歳を頭に四人の遺児を擁して郷里能登七尾町の実家に暮らす夫人貞子のために校友会月報を通じて遺児教育資金募集を行ない、五二五円を集め、そのうちの二三円余りで戸部隆吉抄録集を製本して二十冊を本校文庫へ、二冊を宗教大学図書館へ、一冊を東大印度哲学教室へ寄付し、残額を夫人に贈った。昭和四年に至り、正木直彦、高楠順次郎、堀口蘇山その他の尽力によって遺稿集『日本仏教美術之研究』が芸苑巡礼社から発行された。これには正木直彦、高楠順次郎、結城素明、平福百穂、建昌大夢、北村西望、望月信亨、葛谷龍岬、小野玄妙、松田福一郎、鈴川信一、逸見梅栄、海野清、

関野聖雲、吉田秋光、田辺孝次、野生司香雪、田中万宗、増田正宗、石田はる子、吉村忠夫、林謙三、鎌倉芳太郎、山口蓬春、大野隆徳、堀口蘇山らの文を集めた「追憶録」が付け加えられており、戸部の業績、人柄を知る上で大変参考になる。

⑤ 皇后行啓

大正十年四月二十七日、本校へ皇后行啓があつた。『東京美術学校校友会月報』第二十卷第二号は「行啓記念号」として発行され、当日の模様を詳しく報じているが、ここではその主要部分を転載する。

皇后陛下東京美術學校へ 行啓御次第

一大正十年四月二十七日午後零時三十分御出門

一本校 著御ノ際校長以下職員及參校諸員ハ玄關前ニ生徒ハ門外

ニ於テ 奉迎

一校長御先導便殿ニ著御 御休憩

一校長御覽次第書、學校一覽、職員名簿、生徒人員書等捧呈

一拜謁（勅任官以上ハ便殿ニ於テ奏任官其他ハ通御ノ際廊下ニ於

テ）

一校長御先導 出御

一左記教室生徒課業成績參考品等御覽

日本畫科

豫備科 八重櫻寫生

一年級 鳥類寫生

主任 教授 川合芳三郎

助教 篠田十一郎

助教 小泉 勝爾

二年級 臨模 教授 松岡 輝夫
 三年級 人物 大原女寫生 教授 結城 貞松
 四年級 新案 教授 小堀 鞆音
 研究生 古畫研究 教授 川合芳三郎
 參考室 參考品陳列

西洋畫科

主任 教授 子爵 黑田 清輝
 一年級 木炭畫 人體寫生 教授 小林 萬吾
 岡田教室 油繪 教授 岡田三郎助
 藤島教室 油繪 教授 藤島 武二
 和田教室 油繪 教授 和田 英作
 教官室 卒業製作陳列

豫備科 木炭畫 石膏寫生 教授 長原孝太郎
 廊下壁面 參考品陳列

彫刻科

主任 教授 高村 光雲
 一年級 石膏胸像模刻 教授 水谷 鐵也
 二年級 モデル胸像製作

標本室 參考品陳列

三、四年級 モデル全身像製作
 木彫教室 {製作實習 卒業製作參考品陳列}

建築科 (圖案科 第二部)

第一製圖室 豫備科模寫製圖
 第二製圖室 一、二、三、四年級 模寫及設計製圖
 標本室 建築雛形並標本

廊下壁面 參考圖面陳列

一美術部ヨリ工藝部へ移御 御休憩

圖案科第一部

主任 教授 島田 佳矣
 第一室 二年級圖案實習 助手 塚本 閑治
 第二室 三、四年級圖案實習 教授 島田 佳矣
 第三室 {二年級圖案實習 工藝圖案成績陳列} 助教授 千頭 庸哉
 第四室 卒業製作參考品陳列
 廊下 平常成績陳列

圖畫師範科

主任 教授 白濱 徹
 第一室 {三年生習字實習 塗板畫實習} 講師 岡田 起作
 教授 白濱 徹

第二室 圖畫手工習字ノ成績陳列

助教授 平田 榮二
 助教授 田邊 至
 教授 水谷 鐵也
 助教授 波根 義三

漆工科

主任 教授 白山 福松
 第一室 一年級蒔繪順序 講師 小岩 峻
 第二室 二、三年級蒔繪順序 助教授 堀井 政吉

第三室 四年級蒔繪新案順序

講師 六角注多良
 講師 辻村延太郎

金工科

主任 教授 清水 龜藏
 第一室 一年級毛彫實習 助手 宮坂福太郎
 二年級象嵌肉合高彫實習 助教授 海野 清
 三年級作風打出實習

同スナーリング實習
講師 山本正三郎

第二室 四年級鍛金實習

鑄造科

主任

助教授 石田 英一
講師 野口 六三
教授 津田 信夫

原型教室

一年級筆筒(蠟)型
二年級水盤腦型
三年級燈籠腦型
四年級人物寫生塑造

教授 大島勝次郎
講師 杉田 精二

鑄造工場及
仕上教室

二年級花瓶鑄込實習
三年級人物鑄込實習
三年級水盤鑄型實習
三年級人物鑄型實習
研究生額鑄込實習

助教授 坂口 脛

陳列室 平常成績卒業製作參考品

製版科

主任

教授 結城 林藏

第一室 石版及亞鉛手版實習

第二室 凹版印刷實習

助教授 小林龜五郎
助教授 戸塚 暢夫

第三室 參考品及平常成績陳列

第四室 複寫室濕版實習

第五室 コロタイプ、オブセット
網目凸版印刷實習

助教授 小林龜五郎
教授 結城 林藏

臨時寫真科

主任

教授 森 芳太郎

第一室 卒業製作參考品陳列

第二室 印畫實習

講師 畑 保之

第三室 修整實習

第四室 寫場撮影實習

講師 久米 福衛
講師 成田 隆吉

一 便殿ニ入御 御休憩

一 還御

奉送ハ奉迎ノ時ニ同シ
當日正木校長捧呈文次ノ如シ

臣直彦謹ミテ啓ス

皇后陛下至仁至慈夙ニ 懿旨ヲ教育ニ垂レサセ給ヒ又美術ヲ愛尙
セサセ給フ 玆ニ本日畏クモ 玉駕ヲ本校ニ枉ゲサセラレ 親
シク授業ノ實際ヲ 御覽セラレ給フ洵ニ臣等光榮ノ至リニシテ
感激ニ勝ヘズ謹ミテ目錄ヲ具シ恭シク 左右ニ上ル
大正十年四月二十七日

東京美術學校校長正四位勳二等 正木 直彦以聞

目錄

- 一 御覽次第書 壹通
- 一 東京美術學校一覽 壹册
- 一 東京美術學校職員名簿 壹册
- 一 東京美術學校生徒人員書 壹通
- 一 東京美術學校卒業者人員書 壹通
- 献上品目錄
- 一 草花寫生拾葉 日本畫科生徒成績 一箱
- 一 色紙拾貳葉 日本畫科教授助教授製作 一箱
- 色紙畫題
- 歷史人物 二葉 小堀 鞆音
- 花 鳥 二葉 川合芳三郎 玉堂
- 山 水 二葉 結城 貞松 素明
- 上代人物 二葉 松岡 輝夫 映丘
- 草 花 二葉 小泉 勝爾 青堂

草花 二葉 篠田十一郎 柏邦

一木彫龜子 彫刻科木彫部教授高村光雲作 一點

一鑄銅スベイン踊子 彫刻科塑造部教授水谷鐵也作 一點

一工藝圖案各種 圖案科生徒成績 一箱

一菊花彫木地長手盆 圖畫師範科生徒手工成績 一點

一金地菊唐草小宮 漆工科生徒成績 一點

一毛彫沈金透模様手宮 金工科生徒成績 一點

一青銅鍍金雛文鎮 鑄造科教授大島如雲作 一點

一ゴム畫風景 富眞科製作 一面

一プロムオイル印畫風景 寫眞科製作 一面

以上

大正十年四月二十七日

東京美術學校長 正木直彦

拜謁者氏名〔以下略〕

御巡覽記

(行啓當日職員祝宴會々場にての報告演說筆記)

正木直彦

陛下着御便殿に於て拜謁者の拜謁了りたる後先づ各科よりの献上品を御覽あり 一々御手を觸させられ私の言上に就き聞召され『心入の事である』との御言ありき 次に繪卷物及觀世音寺資財帳を御覽あり 由來資財帳なるものゝ數、稀なるに殊に此觀世音寺のものは伎樂の衣裳、面等に關し詳細を極め正倉院寶庫の寶物等に對する疑義等をも明かにするを得るほど伎樂に關する貴重な

る古文書なる旨を言上し御感を蒙りたり 次に陳列したる程氏墨譜は支那の思想、意匠等を小さき面に表したるは恰も我國の裝劍小道具の如きものにて殊に我工藝界に影響を與たる事多く九谷燒の如きも其例にて工藝全般に涉る參考の珍書なる旨を上聞したりき。

日本畫科に於ては寫生、版畫摸寫等に就き一々御覽あり 殊に摸寫に就ては御感斜ならず陳列したる吉祥天扉繪と其摸寫とを御覽ありて『よくも斯く迄に』との御意を供奉の女官に仰られたるを拜したり 尙古畫にては因果經、雲中行幸等御目を止められ芳崖筆慈母觀音圖畫稿の如きは特に陳列し置く可き様先以て御沙汰ありたることゝて暫らくは玉歩を停めさせられたり 故翁の光榮は實に無上の事なり。

西洋畫科にてはモデル寫生の爲め作業を御覽に供す事はあらざりしも半作の畫面に就て御説明申上たるに教授方法の大體は御會得ありたることゝ拜したり 又泰西名畫の摸寫に就ては黒田教授の説明にて御巡覽あり 日本に於ける西洋畫の歴史的に陳列されたるを御注意深く御覽あり 殊に徳川慶喜公の畫きたるものなどには御興を催されたるやう拜察す。

彫刻科にては塑造製作の順序殊に始めての着手、骨組等を御感あり 木彫にては雛形を前に木材を取扱ふ作業を御覽して、斯くして雛形と同じものを得るやと不思議にも思召たるやう拜し奉れり 又大小自由に縮刻したるものに御目に止られ其自由なる點に御感ありたり。

建築科にては初年級生の製圖作業を御覽あり 其緻密なる線を

引く事に御目を止めらる。依て教養上必要な旨を言上したり。摸型數種も亦御目を惹き殊に平等院鳳凰堂は嘗て同堂に行啓ありし事として『摸型の方却て大體の形をよく會得す』との仰言ありき。

工藝部に移御、御休所に陳列したる陶器織物類に就き御覽あり。當校には今窯業織物の二科を缺く故に特に此二種を主として陳列して台覽に供する事且つ此等は工藝全般に涉る参考として蒐集陳列せる旨を申上げ又古織物の摸造に就ても御説明申上げたり。

次に圖案科御覽生徒の作業寫生より圖案及成績品を順に台覽を得、殊に成績品に就ては珍らしく御覽せられしと拜したり。

師範科に御成此科は三年卒業の課程にて殊に卒業後中等教員たるの目的より其教科目の多端なることを言上し習字の教室を御覽に供す。茲に始めて學科の教室の様子を御覽ありて其様子を御會得ありたるやう拜せり。尙黑板畫の教授方法實習を御覽に供す。其敏捷に簡單に物の象を畫き出だす熟練には供奉の方にも驚かれたる様子なりし。又此科には日本畫、西洋畫、紙細工、粘土細工、竹、木、金の手工製作成績品等を御覽せられ『容易の事でない』又『色々可愛らしき事なり』との仰言ありき。

漆工科にては其教室の設備の異りたるを不思議にも御覽ぜられ其製作の順序等巨細御目を止められ『置ビラメ』の如き其手數の容易ならざるを御覽して『目にも障るべし』との御意あり。参考品の時代區別を以て陳列したるを御感ありし様にて殊に螺鈿の殘具、乾漆佛の破片等其製作方法の研究資料として有益なるものに御注意ありて『學校の参考品は又格別なり』と御仰ありき。

金工科にては作風の獅子を作る方法に就て御覽あり。殊にヤニに固着せしめて作業する等は始めての御覽と拜察す、鍛金部にては金板の伸縮自在に瓶の如きものを造れるを又スナーリングの反動にて金板〔板〕を凸起せしむるを不思議と御覽ぜられたり、彫金は鍛金の上に施す可きものなること又鍛金は彫金と引離しても獨立し得可きものなることを實例に就て上聞に達したり。

鑄造科にては鏡型製作を御覽に入れ臘型〔編〕に非ざれば能はざる一種の味に就き製作物に就きて御説明申上たり。参考室に於ける古鏡六朝佛の如き一々御手を觸させられ又工場にては込型、型割、注湯、仕上等を夫れ／＼御覽に供したり。

製版科にては御覽に供する心算にてもなかりし石版の面研ぎ室にさへ御立寄あり、石版印刷實修を御覽ありては石の出所等に就き御下問あり。結城教授の説明を聞き召され次で凹版、エツチング等の印刷實習を御覽あり。印刷物は其儘御持歸の光榮さへ擔ひたり。参考品にては天然色寫眞、實體鏡又寫眞應用よりなる印刷物コロタイプ、三色版、寫眞銅版等を御覽せられたり。

寫眞科にては寫眞の材料より撮影、現象、定着、修正の順序次にライルプリント及カーボンチツシ等を御覽に供し最後に寫場にての撮影を台覽あり。

再び本館便殿に入御、やがて還御仰出さる。還御啓の後直に宮内省に參候して御禮を啓上せしに宮内官を以て本日は御満足に思召されたる旨傳達あり。其儘退出せる次第なるか本日は天候も御出門の頃より晴れ渡り風もなく塵も舉らず若葉の色も鮮かに殆んど豫定通り洩なく御覽濟になり玉顔麗しく御還啓相成たるは眞に

同慶の至りにて供奉官の如きも斯迄に豫定に差違を來さざることは實に不思議なる事との話さへありたる程にて本校の爲めに祝着の儀にて厚く諸員の熱誠を感謝する次第なり。

⑥ 『南都七大寺大鏡』

『法隆寺大鏡』（第二卷59頁参照）の刊行が成功裏に完結するや、諸方から諸大寺大鏡刊行の要請が起つたため、本校は大正九年七月に『南都七大寺大鏡』の刊行を決定し、再び白石村治に編集を依頼した。翌十年七月、第一輯刊行、昭和四年二月、第七十六輯、補遺一輯の刊行をもって完結した。その後、同七年六月に至り、既刊の大鏡を整理したものが『南都十大寺大鏡』（全二十五卷）として刊行された。

⑦ 関野聖雲の起用と畑正吉の教授昇格

大正十年三月十七日、関野聖雲（本名金太郎）が彫刻科助教教授に任命され、高村光雲のもとで木彫実習の指導にあたることになった。聖雲の制作歴は採用時に提出された左記の履歴書に明らかである。

履歴書

本籍 神奈川縣愛甲郡小鮎村上古沢八十番地ニ於テ生ル

現住地 東京府北豊島郡王子町字王子千五十番地

戸主 平民 関野金太郎 號聖雲

明治二十年五月二日生

學業

明治三十八年十月 高村光雲氏ニ入門

明治三十九年四月 東京美術學校木彫選科入學 同四十四年三月

廿九日卒業 在學中ノ製作木彫白拍子同校ニ買上ケラル

明治四十四年 故林美雲氏ノ依頼ヲ受ケ京都府高雄山神護寺及ヒ

滋賀縣三井寺ニ出張國宝貳点ヲ摸寫ス

大正二年五月一日 第三回東京勸業展覽ニ於テ技藝褒状ヲ受ケ宮

内省御用品トナル

同二年九月二十五日 第二十七回彫刻競技会ニ於テ銅賞牌及ヒ銀

賞牌ヲ受ク

大正三年三月廿日 東京大正博覽會美術館ニ出品入選ス

同五年九月十五日 第二十九回彫刻競技会ニ於テ銀賞牌ヲ受ク

同六年九月二日 第三十回記念彫刻競技会ニ於テ委員及ヒ審査員

ヲ依頼サル 同会ニ於テ銀賞牌ヲ受ケ宮内省御用品トナル

同九年五月 日本美術協會第二部委員及ヒ第六十二回美術展覽會

委員並ニ審査員ヲ依頼サル

文部省美術展覽會ニ彫刻出品 第九回（大正四年）ヨリ同第十二

回マテ四回入選ス

同八年十月 帝國美術院第一回美術展覽會ニ出品入選ス

同九年十月 同第二回美術展覽會ニ於テ特選ヲ受ク

右之通相違無之候也

大正十年三月 右 関野金太郎 印

（大正十年職員ニ関スル書類 庶務）